

中露蜜月と SU-35 の対中輸出

漢和防務評論 20160312 (抄訳)

阿部信行

(記者コメント)

ロシアの SU-35 は、現在生産中の最新鋭機であり、ロシア空軍は第一線に配備しつつあります。中国も導入を希望し、当初(2011 年)4-7 機の購入を打診していましたが、当時 SU-33 や SU-30MK2 のコピー問題で中露がぎくしゃくしており、また当時はロシアの国際的立場が現在ほど厳しくなく、ロシア経済を左右する原油価格も安定していたことから、ロシアも強気で中国を相手にしませんでした。

ところがクリミア問題やウクライナ東部紛争を境にロシアの対西側の立場が不利になり、原油価格も急激に低下すると、一転政治的に中国に急接近する政策を採り始めました。

SU-35 の対中輸出は、リスクが多く、ビジネス的には成立し得ないのですが、プーチンの強い意向で中国を味方にする政治的決定を行ったとのこと。中国が SU-35 をコピーする可能性は否定できませんが、中国を味方につける方が価値があると判断したものです。

漢和の記事の著者平可夫氏は、SU-35 を中国に売らせたのは、プーチンではなく、ロシアを敵に回した米国や日本であると述べています。特に日本は、クリミアやウクライナに利害関係がないのに、米国に盲従したのは日本人特有の横並び文化であると非難しています。米国の強固な軍事同盟国である以上、米国に同調するのは避けられない選択であるとは思いますが。

平可夫

熨斗を付けて SU-35 戦闘機を北京に献上したのは一体誰か？モスクワか？そうではない。それは、ワシントンと東京である。SU-35 を巡る中露蜜月は、東西関係を屈折させた。特に米露、日露関係の最近 5 年間の歴史を屈折させた。KDR 本誌総編集平可夫は、是非この記事を発表したいと考えていた。なぜなら我々は、5 年前から中露の SU-35 交易に就いて特に関心を持って取材してきており、ほぼ 2 乃至 3 ヶ月毎にロシアの高級官員及び中国の消息筋と情報交換を行ってきたからである。本当に残念なのは最後の段階で取材に失敗したことである。本誌は「漢和」の読者に謝罪したいと考える。2015 年 11 月のドバイ航空ショーに、ロシア軍事工業界のおよそ全ての重量級幹部と SU-35 交易のロシア側担当者が集まった。このような機会はめったにない。長年の交際を経て、本誌総編集は彼らの大多数と極めて友好的な関係にあり、個人的にも親しい人が居る。

SU-35 の対中輸出問題について、ロシア軍事技術輸出入集団 (ROSTEC) 国際協力部部長 (HEAD OF INTERNATIONAL COOPERATION DEPARTMENT) VIKTOR N.KLADOV は、ドバイ航空ショーで平可夫に対し、次のように述べた：

SU-35 の基本的技術問題は、双方ですでに解決した。残る問題は価格である。我々は、” 友好価格 ” で中国に輸出することを決定した。貴方もご存じの通り、SU-35 のエンジン、アビオニクス、レーダーは、全て最新型である、と。当時「漢和」は、予感していた：双方のトップは、今年中に SU-35 交易問題を（外交成果として）決着させたいのだ、と。

これは、本来今年の「漢和」の重大ニュースとなるべきであり、真っ先に読者に伝えねばならなかった。しかしドバイ航空ショーの後、平可夫の個人的趣味（イタリアのバイオリン）で CRIMONA（バイオリンの都）に旅行した。その間、正業から離れること 4 日間。5 日目に、中露が正式に SU-35 契約に署名したことを聞いた。11 月 26 日の記者会見で、中国側は” SU-35 問題で段階的な進展があった ” また ” S-400 の交渉が順調である ” ことを初めて認めた。

ここで、ロシア軍事工業界の全体構造を説明する必要がある。KDR 読者が良く知っているはずの人は：ロシア国家武器装備技術輸出入総公司 (ROSOBORONEXPORT) と ANATOLY ISAIKIN 総裁である。「漢和」月刊誌は恒常的に彼の談話を報道している。ロシアの法律では、全ての武器装備の輸出入交渉は、同会社が最終的に責任を負っており、ANATOLY ISAIKIN 総裁の署名が必要だ。

しかしロシア軍事工業全体の輸出入の最高の親分はロシア軍事技術輸出入集団 (ROSTEC) であり、ロシア国家武器装備技術輸出入総公司もその傘下の一公司に過ぎない。ROSTEC の総裁は、S.CHEMTSOV 氏であり、彼は、ロシア国防工業及び輸出入の最高責任者である。彼は、プーチン大統領の親友であり、両者は、かつて同時期にソ連国家安全委員会の東ドイツ部門で勤務したことがある。一説によると、CHEMTSOV 氏は、24 時間いつでもプーチン大統領と携帯電話で話が出来ると言う。

したがって SU-35 の対中輸出の具体案について、具体的な技術交渉に当たったのは ROSOBORONEXPORT であったが、政策的な監督指導を直接行ったのは ROSTEC である。

話は、概ね 4 年前から始めなければならない。2010 年から 2011 年前後、中国は、SU-35 に対し強い興味を示し始めた。しかし 2013 年になっても両国は正式交渉を始めなかった。中国は、一貫した戦術でロシアに探りを入れ始めた。それは、まず 4 乃至 7 機前後の SU-35 を輸入し技術的評価を行い、その後輸入機数を増やすという戦術であった。

この時期、石油価格は高騰しており、ロシアと西側の関係は、2008 年のグルジア紛争を巡る曲折があったとしても全体として米露関係は比較的正常であった。2010 年の赤の広場のパレードには、ドイツ総理をはじめとする西側首脳が基本的に参加していた。米国大統領は、日程の都合がつかず欠席、しかしフランス大統領は出席した。なぜならギリシャの債務問題が急に解決したからである。したがってロシアと欧米の関係は当時問題は無かった。同年 9 月 30 日、米露は、今後数年で 5000

億ドルに近い金額の石油協力枠組み協定に署名した。

同時期、中国の 4 乃至 7 機規模の SU-35 購入希望に対して、ロシア軍事工業界の指導者たちは如何に対応したのだろうか？以下は、当時の取材の結果である。長年「漢和」を購読している読者には、説明の必要はないが、ロシアがこの問題にどのような感触を持っていたか理解できる。

”中国人の戦術は SU-33 の問題と同じだ。我々はこれ以上話したくない。常識で分かるはずだ。4 乃至 5 機程度の市場のために高性能戦闘機を作る国があるだろうか？単価を 1 億ドル以上にすれば別だが”と。

”私個人は、対中輸出に反対だ。間違いなくコピーされる”

”最近、我々は、ロシアの軍事工業界の多くの企業に対して調査を行った。軍事貿易輸出に占める中国の比率は何パーセントか、と。その結果、全く取るに足らない比率であった”と。

2012 年、ROSOBORONEXPORT 副総裁の VIKTOR KOMARDIN 氏は、平可夫に対し：2011 年 11 月の中露軍事協力会議で、中国側は SU-35 を 4 機輸入する旨の提議を行った。我々は本当に驚いた。少なくとも輸入機数が 40 機以上でないと交渉できないと考えていたからだ。

この時期の珠海航空ショーに、ロシア聯合航空機集团公司及び、ROSOBORONEXPORT は、重要官員は派遣しなかった。多数のロシア軍事工業界の高級官員達は、わずか 4 乃至 5 機の規模であれば、対中輸出は不可能と考えていた。

当時のスホーイ航空機集团公司総裁 M.POGOSHAN 氏は、アルメニア人で、商業センスが優れており、この程度の規模の対中輸出には全く興味を示さなかった。彼は一方で、中国のロシア製戦闘機複製の状況を掌握しようとしていた。本誌総編集は、彼に対して、ロシア製戦闘機複製の全体状況の説明会を行った。会見時間は 10 分間の予定であったが更に延長された。

中国の瀋陽航空機会社が SU-33、SU-30MK2 を複製する路線を選択することを平可夫は、なぜ反対するのか？平可夫は、開始段階から間違った路線であることを予測していた。実行不可能であると。これは、道徳の問題だからではなく、まして平可夫個人の親ロシア感情が強いからでもない。中国航空工業の健全な発展のためであり、このため平可夫は、中国航空工業の専門家及び学者に対して以下のような説明を行った：”SU-33 の複製は、カナダのトロントでの中国人の自動車運転免許証取得方法を連想させる、と。すなわち、つまらない欲を出して、許可証のない中国人教官に習って損をしている。日本人は正式の教習所に通い一回で合格し、時間と金銭を節約している、と。しかし中国人は何度も試験を受けるはめになり、最後は、正式なルートを遥かに超えた無駄な金を使うことになる。しかも時間を相当費やし、やっと合格するのに 3 ヶ月もかかっている”と。

SU-33 や SU-30MK2 の複製問題も同じだ。何年過ぎたのか？複製機は量産段階に入ったのか？複製するにも技術開発が必要であり、ウクライナの生半可な専門家の支援を受けることは、實際上無駄金を使うことになる、最終的には、正規の技術導

入よりも高くつくのだ。

我々は、現在まで中国航空工業界のこの複製路線に反対してきた。我々が正しいと確信している。

ここで新たな秘密を明かさねばならない。：この時期、ロシアは、SU-35 の対中輸出について、数量問題と複製問題だけが乗り気でなかった理由ではない。別の政治的要素として：北京との軍事協力が日米との関係に影響を及ぼすのを避けたかったからである。

この時期の日露関係は、歴史上最良の時期に入っていた。衆知の通り、プーチン個人は日本文化、日本食が好きだ。モスクワ軍事工業界の重量級人物は、この時期本誌に述べた：日本人は我々の SU-35 に興味があるだろうか？先行技術の研究に少量機数の購入希望があるだろうか？と。

その場合”モスクワは、如何なる対応を採るか？”

”日本は、我々の武器禁輸国には入っていない”と。

今日、東京はモスクワとの正常な軍事交流を中止している。クリミア問題は東京とどんな関係があるのだろうか？プーチンの任期中に北方四島問題の解決を望んでいるのではないのか？東京の外交の核心利益とは何なのか？全く不可解な外交と思う。

シャングリラ会議で、ロシア国防部長官代表団メンバーは、何度も本誌総編集に詰問した：君は日本通だから聞かすが、クリミアと東京はどんな関係があるのか教えてくれ。彼らはさらに経済制裁を追加するのか？と。

KDR は、真に実感した：ロシアは、日本の外務省が宣言した第二段階の追加制裁に就いて真に不満である、と。ロシア外交部の日本通でさえ理解できないでいる。人並みに行動する（集団で歩調を合わせて、目立たないように行動する）思考の文化は、G-7 内でも同じだ。二流国家の劣等意識で盲目的に米国に追随することは、日露関係を害した。そして SU-35 が中国に渡った。

2012 年、プーチンが 3 回目の大統領当選時、KDR は、ロシアと米国、欧州の関係が大きく冷却したことを明確に感じた。米露関係が極めて冷淡な時期を迎え、相互にスパイを駆逐しあった。

中露の政治、軍事関係の変化は、2012 年のプーチンの再選時から現われた。オバマ大統領は当選の祝電を送らず、一方の習近平は、プーチンに熱情あふれる祝電を送った。

2012 年全体を通じ、中露双方の SU-35 の輸入数量は 4 機乃至 7 機なのか或いは 40 機なのか協議が続けられたが非公式協議であった。2012 年 8 月、平可夫はロシア人の心が動き始めることを予感した。ロシア軍事工業界の重量級人物は、「漢和」に対し瀋陽航空機会社の複製 SU-33 をどう見るかいつも聞いた。中国は、SU-33 を複製する能力はあるのか？等々。「漢和」の当時の記事タイトルは：今回中国は自己の実力と欠点を明確に認識しなければならない、であった。

「漢和」の当時の報道は、瀋陽航空機会社のクローンの方法は、長期的に見て中国の戦闘機技術の進歩を停止させるものであると指摘した。しかも J-15 及び J-16 は

使い物にならない戦闘機になる可能性が極めて高い、と。我々は、この観点が正確であると確信している。世界的に見ても、このような航空機メーカーが存在するだろうか？しかも社会主義の下で工業化が図られ 60 年も経っているのに。我々の中立、公正かつ合理主義的思考方式は、中国の一部媒体から個人攻撃を受けた。しかしある一点だけは肯定出来る。プーチンの 3 回目の当選は、中露関係を徹底的に改善し、SU-35 の輸出が可能になる政治的決定がなされた。これは、2012 年 6 月のことである。

” アンドレー（平可夫氏のこと）、我々が協議しているのは中国がロシア製戦闘機を複製する問題である。我々の軍事工業会議内部ではこれが主たるテーマであるのに政治家の考え方は全く違うようだ。我々が重要テーマと思っている問題は、大統領にとっては羽毛のように軽い問題のようだ。プーチンは中国人にプレゼントの花束を与えようとしている。彼らを満足させるのが政治である、と”。

2013 年、スノーデン事件が発生した。これは決して小事ではない。米露関係はさらに冷え込んだ。中国人は” 利口” だ。2013 年 11 月の中露軍事技術協力装備会議で：SU-35 を 24 機輸入したいので交渉したい、と持ちかけた。ロシアにとって 24 機と 4 乃至 7 機では対応が全く異なる。しかしこの申し出の後も、この時期のロシア聯合航空機集団内部では依然として反対論があった。” 24 機は疑問だ。SU-30MK2 と同様にその後コピーするつもりではないか？” と。M.POGOSYAN 氏は、中国は少なくとも 48 機以上輸入すべきであると考えていた。しかしどう言おうと 2013 年 11 月から中露間で SU-35 の正式協議が始まった。彼はその時すでに聯合航空機集団総裁に昇任していた。

このように少ない機数規模の輸出では、協議開始後も多くの異論があった。ロシア軍事工業内部では対中輸出に” 熱心でない” グループが大多数を占めていた。これが 2013 年の状況である。

その後、2014 年のクリミア、ウクライナ東部危機後、ロシアと西側の関係は、特にワシントンと東京が追加制裁を宣言してから、大幅に悪化した。ロシアは実際上西側から孤立し、G-8 から追われた。禍は一つでは済まない。石油価格が大暴落し、2014 年からロシア経済は大きく傾き、ルーブルの価値が低下した。

2014 年は、中露両国の指導者が歴史上最も多く接触した年となった。少なくとも 3 回のトップ会談が開かれプーチンと習近平は自ら SU-35 問題に関わった。この一年、24 機の SU-35 輸出が政治の目玉になった。

” アンドレー、SU-35 の輸出案件は、両国首脳がすでに決定した目標である。我々の任務は円満に任務を完遂するだけである。” スホーイ航空機集団会社の副総裁クリメンチェフ氏は本誌にこのように述べた。

2014 年 8 月、ロシア軍事工業界の権威筋は KDR に対し：中露は SU-35 の輸出機数について最終的に妥結した。それは 24 機である。双方の交渉は、困難が伴った。主な問題は：中国の要求に基づいて改修し、中国製の武器、通信系統、IFF 系統等々を装備出来るようにした機体を輸出することであった。我々は、まず先に基本型を

中国に輸出し、その後に中国の要求に基づいて改修する方が時間と費用を節約できると考えている。この問題に関する交渉は繰り返し行われた。少なくとも1年はかかった、と述べた。しかも中国側がロシア側に要求する難題はますます多くなるようだ。最も多忙だったのは2015年である。中国代表団は、SU-35の工場、空軍基地を参観し、SU-35のシミュレーターに搭乗した。プーチン大統領が2015年にワシントンと東京に”大きな贈り物”をするよう求めたからである。交渉は、価格、武器、アビオニクス、訓練及び整備修理等々の数個のグループに分かれて行われた。

ここでついでに、中国の軍事改革は誰が主導しているかの問題について述べる。改革を深化させるグループの長は習近平である。副グループ長は許其亮、范長龍大将である。しかしモスクワの中国問題アナリスト及び外交消息筋は、KDR に対し：許其亮大将は軍内で絶対的な権威があり、習近平に心酔している。彼は一切の技術問題で独断意志決定できる位置にある、と述べた。

KDR は、ロシアの対北朝鮮、対中国政治・外交・軍事技術に対する分析は、外部世界の中では最も真実に近いと考える。モスクワは、優秀な専門家、真の専門家を有している。

SU-35 協議に就いて、2015年11月、最終的に協議が成立する前の3日間、双方は”友好価格”について最後の交渉を行った。その後許其亮が決裁し署名した。ここに彼の権威の実態を見ることが出来る。これは不思議でもなんでもない。習近平はそれほど彼を尊重しているからだ。第一、彼は福建省空軍の出身である。また前空軍司令として当然技術に精通している。

最後の結論は：2013、2014、2015年と米露、日露関係は毎年変化しており年々関係が悪化している。SU-35の対中輸出は、年々実現可能性が高くなり、最終的に実現した。

本文の当初に戻ると、双方は、2015年8月から11月の間に、懸案であった全ての技術的問題を解決した。

以上